

よしだけ
吉竹遺跡

所在地 新城市牛倉字吉竹地内
(北緯35度55分37秒 東経137度30分54秒)

調査理由 第二東海自動車道横浜名古屋線

調査期間 平成20年4月～平成20年6月

調査面積 350㎡

担当者 酒井俊彦・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「三河大野」)

調査の経過 発掘調査は第二東名高速道路建設工事前の事前調査として愛知県教育委員会を通じた委託事業である。大宮川の付け替え工事範囲が調査対象地となった。

立地と環境 新城市域を流れる豊川右岸の地形は、山地と河岸段丘と小河川によって形成された谷で構成される。遺跡は豊川支流の大宮川が山地から河岸段丘地帯へ流出する地点に位置し、大宮川がつくる谷地形にできた狭小な南向き緩斜面に遺跡が展開する。標高は98～99mである。地表面約70cm下に河川堆積による黄褐色砂礫層があり、その上面で遺構が検出された。

弥生・古墳時代の集落 竪穴住居跡が5棟検出された。このうち047SI・071SIは弥生時代後期である。047SIは床面中央で、071SIは中央からやや南よりでそれぞれ炉跡を検出した。071SIは東西4.3m南北5.5mの規模である。その北壁が比較的良好に残存しており、地山を掘り込んだ深さは約40cmである。その付近で炭化したイネ科と思われる植物の茎が並べられた状態で出土した。屋根葺き材もしくは壁材と考えられる。015SI・045SIは土師器小片がわずかながら出土することから古墳時代初め頃と考える。この2棟は若干平面規模が小さく、一辺約3mの規模である。045SIの底面中央でも炉跡が検出された。046SIは071SIに一部重複する位置にあり、覆土中から古墳時代前期の土師器が出土することからこの調査区内で最も新しい時期の竪穴住居と考えられる。

掘立柱建物は数棟が検出されたが遺物はなく時期は明らかでない。

出土遺物 遺物は竪穴住居017SIでの出土が最も顕著で、弥生土器の壺・高杯がみられた。尾張地域の山中式に併行する時期である。046SIでは土師器壺・甕が出土した。竪穴住居と異なる時期の遺物としては石器剥片や縄文土器の可能性が考えられる破片が出土しているがごくわずかである。

石製紡錘車 047SIでは石製紡錘車が出土している。直径4.8cm、厚さ0.5cmの円盤形で中央に径0.8cmの穿孔がある。石材は溶結凝灰岩で、顕著な文様はない。

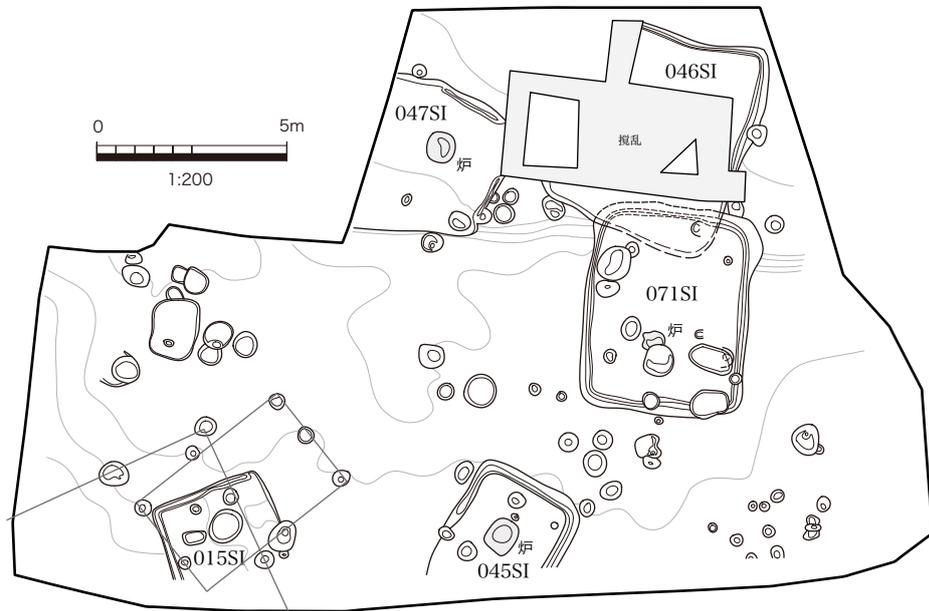
遺跡の特徴 調査区東方の耕作地では圃場整備時に磨製石斧や山茶碗が採集されており、遺跡の広がりを感じさせる。しかしそれを含めても集落が営める範囲は、大宮川左岸の東西に細長い約1,000㎡の平坦地に限られる。大宮川右岸には北下遺跡があり、縄文時代後期と弥生時代の石器のほか、平安～室町時代の遺物が出土する。しかし弥生～古墳時代の集落遺跡は未確認であり、現状では大宮川左岸の小規模な集落と位置づけられよう。

新城市域では、弥生時代後期～古墳時代前期の集落はこれまでのところ、河岸段丘縁辺を中心とする標高95～110mの範囲で確認される傾向にあり、地域的特徴であると予察される。この立地に注目してゆけば、吉竹遺跡のような小規模集落の発見が今後より一層進むものと思われる。(永井邦仁)



調査区全景(東から)

047SI出土石製紡錘車



遺構配置図